

古文書倶楽部

この夏は「山崎文庫」を読破しよう!

公文書館閲覧室に、「山崎文庫」の複製本二二三冊がはいりました。

「山崎文庫」は、県職員を務めながら地方史を研究した山崎真一郎氏(一九〇二〜一九六二)が収集した史料群の総称のことで、全部で二二五〇点あります。

山崎氏は『秋田県史』の維新編・明治編を執筆したことから、「山崎文庫」にはそのための資料や原稿が数多くあります。

「秋田県史資料雑纂」(山一八八・山一八九)「県史編纂資料 水産 久六嶋・八郎 潟十和田湖」(山二三八)「維新前後史料 飛耳記・蠅螂日記共」(山三二二)「戊辰記録雑纂」(山三二四)がその一例です。

歴史関係以外にも「学校沿革調査書」(山八三七)「山八四四」をはじめとした学校

【発行】
秋田県公文書館
古文書班
2005.7
第3号

関係の資料があるのは、山崎氏が『秋田県史』文芸・教学編執筆の準備に携わったからでしょう。

「山崎文庫」に収められている史料は、歴史には興味があるけれど、くずし字を読むのが苦手だと感じる方にとって利用しやすいと思います。

こういった山崎氏による自筆の原稿は、ほとんどが鉛筆や万年筆で書かれています。鉛筆や万年筆は、墨とは違って永久に残るものではなく、将来文字がうすくなり、みえなくなる心配があります。そこで将来利用できなくなるおそれのある史料を中心に複製本を作成しました。

複製本の中には、昭和三二年から三三年までの「新聞切抜」(山一八五・山一八六)というものもあります。山崎氏が関心をもった新聞記事の切り抜きを集めたものですが、当時の広告も収録されていて、古文書が読めない人でもノスタルジックな気分が味わえる、おすすめの一品です。

この夏は、冷房のきいた涼しい公文書館



「山崎文庫」複製本は閲覧室奥にあります



お気軽にご利用ください

閲覧室に足を運び、山崎氏が残してくれたものをじっくり読んでみませんか。

(後藤富貴)

「砲術稽古は遊び感覚!？」

渋江和光日記
刊行本・第12巻
7月より

天保十年(一八三九)七月十日、渋江和光は宇都宮帯刀、真壁又十郎、中安内蔵ら秋田藩の上級家臣十五名で砲術稽古を行っています。

内蔵殿こしあんの餅沢山
茶共に持参いずれも給候
例之通二種の着、内一種
精進物・酒二升なり
八寸一つ、五寸二つ、五
寸の台三つにて、我等五
寸二つ中り也、少々勝
申候

酒を呑み、あんこ餅をほおばりながら的を狙う侍の姿は、まさに天下泰平。他の砲術稽古の記事を探しても、ノン・アルコールの日は全くないのです。

見てください!この緊張感の無さを!

更に渋江和光、続けて塩谷伯耆の欠席について書いています。

塩谷伯耆殿よりわざわざ手紙にて、下痢の所痔疾にて立居迷惑に付、申し訳申し来た

り候

それにしても塩谷伯耆、まさか百六十六年後にお尻の状態が暴露されることになるとは、ゆめゆめ思わなかつたでしょうね。

(塩谷伯耆、もって瞑すべし。「そんなことはシリたくない」)

* 史料中の「台」は、他の砲術稽古の記事に「桶台」「箱台」を使用したとあるので、火縄銃を台に置いて撃つ射撃法があつたと考えられます。(畑中康博)

古文書こぼれ話

手元に、表紙も奥付も欠けている、江戸末期に出版されたと考えられる書簡文の手引き書があります。

その中から、書簡の基本的な作法について紹介します。古文書解読の際の参考になれば幸いです。

まず料紙については、**縦紙・折紙・切紙**があります。縦紙は、全紙を横長に置いて書きます。右側を「袖」、左側を「奥」と呼んでいます。折紙は、全紙を横に二つ折にして書

きますが、この場合は折目が下になります。略式の使い方だそうですが、これが一般的だつたようです。切り紙は、縦または横に切つて用いたものです。

次に差出人や宛名が連名の場合ですが、差出し側が連名の場合は、位(身分)の低い人物から順に書き、高い人物が最後に書かれます。宛名の場合はその逆で位(身分)の高い人物から順に書かれ、低い人物が最後になります。

月日の書き方については、月日の下に差出人の名を書きますが、連名の場合については、二人の時は、二人の名前の上部中間に書き、三人の時は、二人目則ち真ん中の名前の上部に書きます。大勢の場合は、一人目と二人目の中間上部に書きます。ここで紙数が尽きたので、続きは次号します。(嵯峨稔雄)

編集後記

夏になりました。古文書解読講座が七月の末から始まります。くずし字に触れ、自分が住んでいる地域の歴史を直接読みとつて、過去とつながる今を再発見してみませんか。(内藤)